

指導を受けるならば、私たちはこの共同体としての一体性へと進むことができます。最終的には、私たちはアトマン、魂、靈魂の一体感を達成しなければなりません。そして、そこにおいて前面には現れない全知、全能、永遠、不変の存在がバラ・ブラフマンと呼ばれるものであります。アトマンに到達するまでの試みのすべては、生活における善の行いと、個人差を忘れ全人類相互に一体化をもたらそうとする努力であります。これは、表面的な国境やさまざまな障害物を取り除いて、私たち人間の全生活を改善してくれる考え方、あるいは行動へとつながります。宗教はまさにそのような指標の一つなのであります。このように、文化の価値はまさに私たちの考え方によって規定されております。

最後に、インドの祈禱には次のようにあります。これはインドのすべての寺院に書かれているのですが、そこには「すべての人々が幸せでありますように、世界が幸せでありますように」と記されているのです。またインドのある僧院には、インドの独立記念日の言葉が書かれています。そこには「あなたが社会に対して貢献していることは何ですか」という問いかけがなされています。今私たちに必要なことは、人類の平和のために祈ることであり、そしてこのような努力が最後まで続けられることでもあります。ヒンドゥー教の最大の貢献はこの側面にあると思います。



田中熊雄（タナカ・クマロ）

一九一一年生まれ。

日本大学卒業。現在、宮崎大学名誉教授。専攻…日本古代史。

〈主著〉

『宮崎県庶民生活誌』、『日本民族（宮崎県）について』
他。

一 序

この論文で試みたことは、神道の特性考察、神道に内在する宗教原理の究明である。それがなくては宗教統一を進展させる方が判明しないからである。神道の諸相が、統一思想に融合し得るかどうかに深い関心を寄せながら、久しい神道の歴史の中で、外来文化に染まらない時代、すなわち古神道に視点を当てて考察してみた。

二 神道の名称

神道の語は、中国の古典（易経）に、「聖人以神道説教（せいじんしんとうをもっておしえをもうけ）、而天下服矣（しかしててんかふくす）」とあるのが最古のものであって、靈妙なる道、優れた道の意である。わが古典には、「天皇信仏法、尊神道（てんのうほとけのりをうけたまい、かみのみちをたうとびたまう）」（紀三十一代用明天皇即位前記）とか、「尊仏法（ほとけのりをととび）、軽神道（かみのみちをあなずりたまう）」（紀三十六代孝徳天皇）の記録に見られる。これは仏法との対語として用いられているが、わが国本来の固有信仰の実践道に、中国の神道という語を転用したものと思われる。

八世紀初頭『日本書紀』編纂の用例で、外来の宗教文化との対比において、在来の神祇の祭祀を自覚し、それに相応しい神道の名を採用したという事情を示したものである。民族的宗教の自覚である。記紀編纂の時代はも

もちろん、儒仏流入以前に既に存在していた日本人の信仰について、基本的に神道と称したものと考えられる。

三 神道の特性と神話

神道は果たして宗教か非宗教か、依然として明確性に欠けるところがある。それには、神道の成立が、日本の民族文化と一体となって、その民族社会を一度も離れて営まれたことがないという事情や、宗教というのには漠然としていて、神道に触れているはずの日本人も、宗教意識を発生させないという現実面がある。すなわち生活の一部をなしてきた宗教文化であるため、初めから馴染みきった営みであり、また伝統文化の一端でしかないためである。

それは、現実の風土と社会が、そのまま宗教の世界だとする立場から見れば、宗教以前の宗教ということになるであろうか。その意味で、神道は非宗教なのだろうか。人類の社会歴史において、宗教を営まなかった民族社会は一つもなかったのである。

さて日本の固有信仰と呼ばれるものは、特定の教祖や経典を持たぬ民族信仰に根差していて、日本の風土と民族文化を抜きにして営まれたことがない。全く日本民族は、日本的価値志向性を基本として、古神道とも総称されている宗教を成長展開してきた。

特に、神社神道は本質的に教義によって拘束し得ない何ものかを持っているという共通理解が、神道人の間に温存していた。それが実践的綱領の基礎となり、背景となる信仰についての教学的論争が皆無に等しいという現

実をもたらしてしまった。だから、神道信仰の基礎にある思考の枠組かみぐみやその論理的特色を折り出す作業が容易でないのも当然である。神社神道界で、神道は宗教にあらずというように言われるのも、神学的操作を踏んで教義を立てる宗教として育たなかったからである。

それならば、経典を持たなければ宗教とはいえないのであろうか、然らず。経典型宗教のほかに、神道のように、儀礼を中心とする宗教も認められなければならない。経典型宗教との対比において見れば、神道は行型の宗教として認識することができる。神道は、民族固有の文化の中で教祖を持たずに、神話・儀礼伝承を中心に生き続けた宗教であるから、そこには必然的に教義的なもの体系化が甚だ稀薄となった。「道なきが神道の道」(本居宣長)という表現は興味深い。神道の担い手である、日本民族が、歴史的に形成し続けた民族宗教である。

この民族の始原を極めるために、『古事記』、『日本書紀』神話について、特に神話の一般論を踏まえて検討してみよう。神話は儀礼や信仰、社会組織などの文化的要素としての聖なる事柄に関する物語であり、それも始原の出来事について物語るものである。どのようにして混沌(無秩序)から宇宙(秩序)が生まれたか、どうして無人の世界に人間が住むようになったのか、どのようにして動物が生じるようになったか、善悪の発生など、あらゆる事象に先立って、その存在に根拠を与えるという存在論的な任務を主要事としている。神話に登場する行為者は、現在の人間が行うことのできない行為能力を備えた超自然的存在である。この超自然的存在による創造活動の叙述が、中心テーマとなっている。そのため、神話は歴史的事実に関与しないと考えるが発生するのであるが、これは全面的に承認できないことである。神話は、それが信じられている限りにおいて事実であり、その点で、歴史の一部を構成していると考えざるべきであらう。

(2) 神々の由緒

天地の初めるとき（天地開闢のとき）、高天の原にお生まれになった神様は、まず

- ① 天の御中主の神（天の真中にましまして、万物を主宰し給う神）
- ② 高御産巢日の神（万物生成にご尽力になった神）
- ③ 神産巢日の神（万物生成にご尽力になった神）

次に、国がまだ固まらずに、浮かんだ油のようで、水母のごとくどろどろしているときに、葦の芽の萌え出るように、天に騰のぼりてくる勢力によって、お生まれになった神様は、

- ④ 宇称志阿斯訶備比古彦の神（葦の芽のようなものによって生まれた神）
- ⑤ 天の常立の神（葦芽のごとく燃え上がるものが、上がり極った所で生まれ給うた神）

この五柱の神は、天上でお生まれになった独身神ひとりかみで別天神ことまろかみだから、他の国土に生まれ給うた神々とは区別申し上げる神々で、なお御身をお隠しになった。次に

- ① 国の常立の神（浮く油のごとくに漂っていたものの中で、上上がるものは既に燃え上がり尽くして、その後残って下に留るものによって生まれ給うたという神）
- ② 豊雲野の神（浮く油のごとく漂っていたものの中に籠っていたものが、これから発育生成しようとする状態で、お生まれになった神）

この二柱も独身神で御身をお隠しになった。次に

- ③ 宇比地邇うひじにの神（潮と土とが混じっていて、また分れない状態にあるときお生まれになった神）
妹須比智邇いすひぢにの神（潮と土とがようやく分かれたときお生まれになった神）

- ④ 角杵つぬぎの神（御形のさざし始めた神）、妹活杵いづくぎの神（活きはたらきそめる神）

- ⑤ 意富斗能地の神・妹大斗乃辯いとむとのちのちのいとおと乃のべの神（漂っていたものが、少し凝り固まってきて、国土らしいものとなった状態に、お生まれなされた神）

- ⑥ 淤母陀流おぼたたまの神、妹阿夜訶志古泥いあやかしのこねの神（何の不足もなく備り整ってきて、すべて満ち足りているので、それに対して畏み敬う状態にお生まれなされた神）

- ⑦ 伊邪那岐いざなぎの神、妹伊邪那美いざなみの神（国土を生み給うために互いに誘い合われたので、つけられた御名の神）である。御夫婦である。

この七代を神代七代かみよしろだといって、一層古い神代といわれている。

さて天の御中主の神以下の御五方の天つ神のご命令として、伊邪那岐、妹伊邪那美の命の御二神に、まだ固まらない、この国土を造り固めるようにとの仰せが、天の沼矛を賜り、国土固成の事業をご委任あそばされた。そこで天の浮橋にお立ちになって、国土を固成された。

まず淤能碁呂鳥おのこま（自然と凝り固まってできた鳥）をお生みになった。次に蛭子ひるこをお生みになって、葦の葉で作った船に入れて流し捨てられた。次に淡鳥をお生みになった。御子の数に入らなかった。「今吾が生んだ御子はよろしくない。」天つ神の御許に参っておしえを受けられた。

そして御子、淡道之穗之狭別鳥あわじのほのさわけのしま、伊豫之二名の鳥（身一つに面四つ）、次に隠岐おきの三子みつこの鳥、次に筑紫つくしの鳥（身

一つに面四つ)、壹岐の島・津島・佐渡の島・大倭豊秋津島(淡道之穗之狭別の島以下この八島を大八島国という)をお生みになって、次に吉備の児島・大島・女島・知訶の島・両児の島をお生みになった。以上国生みを終わって、さらに神様をお生みになった。大事忍男の神・石土毘古の神・石巢比売の神・大戸日別の神・雨之吹男の神々をお生みになって、最後に火神をお生みになって、伊邪那美の命はついに神選りました。

その後で伊邪那岐の命と伊邪那美の命の対話が交わされた。「最愛のわが妻の命よ。私があなたとつくった国が、まだ全部でき上がっていないから、もう一度現界へお還りなさい。」女神は「残念なことには、あなたが早くいらっしやいませなので、私はこの黄泉国の竈で煮炊きした物を食べました。：中略：まず委細をこの黄泉の国の神と相談しましょう。その間私をご覧になってはいけません。：下略」

伊邪那岐の命の冥界訪問神話には、人格神(黄泉神・予母都志許売など黄泉の国に付属する)のほかに、非人格神(意富加牟豆美命：桃や道反大神：千引石) (自然物でありながら、それが發揮した特異な働きによって、人格を成就した神、すべて黄泉に属する神である)が突如として語り出される。非人格神については、自然物の神格化としてではなく、日本の伝統的な自然あるいは物(もの)に対する認識が、自然の法則によって支配される生命のない自然とは範疇を異にしている自然である。われわれの知る自然界すなわち自然物としての存在は、すべて神となるべき可能体としての存在を思惟するのである。その物の内包する力は、働きとして認識され、その働きが特異なものとしてとらえられたとき、そのものは神として、人間との間に特殊な関係を持つようになるのである。従って、それは、物が神格化されたという在り方であるのではない。この理解の如何によって神道の認識が異なってくるので、十分注意しなければならない。

伊邪那岐の命は、「私はいやな汚いものを見た。汚い国に行ったことであるわい。その穢れを祓うために身を禊しよう」と仰せられて、筑紫の日向の橋の小さい水門のみそ萩の生えている原に行かれて、御身の汚れを洗い滌ぎ、祓い捨てられた。そのとき投げ捨てられた御杖に神が誕生し、御帯、御下着、御衣、御袴、御冠、左の手飾(三柱の神)、右の手飾(三柱の神)に十二柱の神々がお生まれになった。これらの神々は御身につけておられたものを脱ぎ捨てられたときにお生まれになったのである。さらに中つ瀬に降りられて、水の中に潜られ、穢れをお禊いになるときに、綿津見の神がお生まれになった。この綿津見の神の御子は宇津志日金柝の命、その子孫に阿曇の連達がいる。阿曇の連達は綿津見の神を祖先の神としていつき祀ったのである。なお伊邪那岐の命が左の御目をお洗いになったとき天照大神、右の御目をお洗いになると月読命が、御鼻のとき建速須佐之男の命、三柱の貴子の御出生となった。御身の禊ぎ祓われることによって、お生まれになった神々は十四柱であった。伊邪那岐の命は三柱の貴子をお喜びになり、御首飾の珠をとられて、天照大神に賜った。そして仰せられるには、「あなたは高天原をご統治なさい」とご委任になった。月読命には月の世界を、須左之男の命には海原をご委任になった。

天照大神は今日皇室の御祖神として奉斎されるのであるが、その系統は、①天照大神 ②天之忍穂耳命 ③天津日高日子番能邇々芸命 ④天津日高日子穗々手見命 ⑤天津日高日子波限建鵜草葺不合命であり、これを最後に神代が終わるのである。以下人の世となって、神倭伊波礼毘古命が初代の神武天皇として登場されたことを伝えている。

神話は、神代から人の代へと、それぞれ洪滞もなく、歴史の流れとして、自然に読み下ろしていけるのである。

神代の神々は人間的に語られており、また人代ひとよの人々が神に近い姿において語られ、巻を進めるに従って、人間時代の歴史に移っていく。すなわち人と神とは近接し、互いに融即し得る存在として語られている。それは、上古の人たちが、神の行為と人の行為とを融即的に観念する場を持っていたからであり、このことは、祭政一致という古代的事実から、神事儀礼という神人融合の行為からも理解されるであろう。

以上見てきた日本神話の神々には、「成ります神」と「生まれる神」の二類系がある。次にそれらについて検討してみよう。

五 神々の出現形態

(1) 成ります神

天あめの成立にかかわる五柱の別天神や、神代七代の神々、あるいは伊邪那美大神を素因とする神々、伊邪那岐の神に関連して出現する神々、また天照大神、須佐之男命に関する神々で、神道の神観念を理解する上で極めて重要な神々である。伝承的な日本人の信仰の中で、重大な役割を果たし、かつ中心的な位置を占めてきたすべての神々は成ります神に属している。これら神道の神々は、所与の物実ものごとから成ります神である。既存の高天原という世界そのものが物実なので、その世界に内在する力（生命力）が自己発展、自己生成することによって出現した神々なのである。

神道では、物事の始原を原理的に論理的に超越的な実在神として思惟することはなかった。一切の存在に先立

ち、存在を創造する絶対神ではない。有限で、相対的であり、必然的に多神である。神道の大きな特色、それは八百万の神々が信じられてきたことである。日本文化の核と同質のものを基礎としている神道の思惟である。

そこには絶対観念は存在しない。不在である。唯一神を奉ずる宗教とは、顕著に決定的な相違を示すのである。古典の成立時代には、既に大陸から儒教の影響を受けており、当時の日本人が絶対を知らなかったとはいえない。それにもかかわらず日本人の多くは、その当時およびその後の歴史過程を通じて、絶対化とは異なる相対性世界の中に生きてきたように思われる。多神を信じ、絶対を持たない神道は、その生活や思惟の形態において、どんな特色を示したかといえば、原理的には普遍ではなく、個別を思考するのである。社会学的立場では、家の仕来りや家訓が重んぜられ、郷に入っては郷に従えなどとなる。このように神道は一元論ではなく、多元論の立場をとることにならざるを得ない。争いの場においても、自己は常に相対的な真理をしか保持しないのである。だから自己が正しければ、相手は必ず間違っており、そのゆえに罪もまた全面的に相手に帰せられるべきものという発想は、神道からは出てこない。現実はや協による調和、そして調和に基づく成長が可能だという理想を持っている。

(2) 生まれる神

成ります神（なる神）に対して、他に出現する神の形態は生まれ出ることである。国生みによって伊邪那岐・伊邪那美の神から生まれた鳥々が、神としてとらえられ、認識されている。鳥生みではなく、国生みであるが、鳥が西洋的概念でいう自然ではなく、一つの総合的生命体の国としてとらえられている。出雲系神話にも、その

他系譜的整理のないままの、御子神として出現する神々である。この生まれる神は、生む・生まれるという親子の関係を意味するもので、人は神の子という立場の意識を持ち込むことになる。

出雲国造家が天之菩卑能命を祖神として傳承し、中臣連は天児屋根命を、忌部首が布刀玉命、猿女君らが天宇受売命を、隼人阿多君が火照命をそれぞれ祖神としている。これらの諸氏族が神話に登場する神々を自らの祖神とする傳承を、神話が伝えようとしていることに注目したい。人間は神の生みの子、すなわち神の血縁による子である。それは神話を傳承した各氏族が、神話に登場する神々をそれぞれ祖神として語っていること、また人を表現して青人草と呼び、国土と一体なものとして、発想されている。それから推考すると、ここでは人間が本来、神の子・神の生みの子として理解されていたと考えてよい。

人は神の分霊を受けて生かされている。だから人と神とは本質的には同格なのである。そこには人間に神性が認められなければならない。当然人が神として祀られることもあり得るのである。その信仰について何の拘りも示さない。これも人と神とが同質あるいは一体となり得るものであることを信じているからにほかならない。ここで神人相依の關係が生じてくる。信仰思想史上誠に古い基本的な思想である。神と人との最終的帰一は、人が神を敬って常に身も心も清浄に保ち、正直に徹して神の境地に近づくことに努め、神威を高め、神人合一して神の徳を受ける。それによって人はますます運を添えることになる。これは、神人同格である神道の本質的表現としての、神と人との互助共栄の原理である。人と神との授受作用である。これは大宇宙存在認識の原理的思考である。

六 神社神道

神道は共同体の祭祀として、国家や地方、職域や家また性別、年齢など多方面の相互作用、その他外来宗教文化の影響を受けて、民族の歴史とともに複雑な發展経路をたどってきた民族宗教であるから、単純な分析で割り切れるものではない。また直接国家の管理下におかれなかった神社であっても、日本の伝統文化と生命共同体に支えられ、社会的習俗の方面で、祭りや年中行事、人生の通過儀礼などを通じて生き続けてきた。一方では個人的教団組織の形で發展を遂げるなど、多様な現象を示してきた神道の定義は容易でない。しかし、その中心に神社が存在していたことは事実である。それゆえに神社は神道にとって、その中核的基盤でもあり、そこで行われる神祇祭祀には、神道の古典形式が残されている。

天つ神・国つ神の祭、その祭の場が神社である。神の社、お宮、神殿、神の鎮まる神聖な家といわれる建築施設を含めて、その境内全域の聖地を指しているのである。神の社は、祭にあたり神を迎える聖所、また神の社、こんもりと盛り上がった樹木の群落である。神の鎮まる森そのものであり、神を祭る場であった。人々が祭によって神を迎え歓迎し、神々と交わる場所である。人々が共同生活のために、共同の神を祀って連帯を維持するとき、そこに神が立ち現れるのである。

血縁同族の氏子集団と地縁的群(村)集落の村落共同体が、風土の神々に結び付いて、さまざまな神社が傳承されてきた。こうして神と住民の間には、神道特有の神人關係が成立して、氏神と氏子の血縁的紐帯が強調さ

れてきた。この神祇尊重の儀礼的習俗は、わが国の伝統であり、不文の慣行として継続実践されてきた。

こうして太古さながらの山水を、そのまま神苑とし、清澄な自然に神霊を感受することが、古来神道の原点である。単なる動的対象化の自然ではなくて、人々の生活に神として触れてきた自然、里近くの山裾や海浜に鳥居を立てたり、森の木や岩礁に標繩を張って、霊的な神の世界を感じとった神聖感応的自然である。

そのゆえに、ここに神籬・磐座を立て備え、神々をお迎えして祀った。神社はめぐりくる祭りを通じて、神と人と自然とを一团とした郷土意識の中に、新しい霊的活力を注いでくれる場でもあった。これら自然の諸相に神々の霊力を観想する日本人古来の宗教感覚は、大自然の生態系の中に人間も生かされていることを実感した姿である。神道の成立は、本来原初性の自覚による民族宗教であるから、古代さながらの神事を本旨としているのである。

原始的な自然崇拜で宗教に値しないなどと批判する立場をとる人は、記・紀神話にも記された古代人の持つ自然観に対しての理解を欠き、現今科学的にも十分実証を求め得る大自然の生態系の中に、人間が生かされていることすら認識し得ない人々の浅い思慮からの発言である。人間の生きる生命の神秘も、自然の成長展開を司る生命力も、その本質において相違を認めないのが、日本の生命観である。そこには自然神も、既に出発点から同時に人格神として宗教的な認識を経ていることを知らなければならぬ。このような発想が、神道の根本的な宗教的心意であったのである。

七 生業と神々

地方の一般庶民の間には、村落や町内の氏神鎮守の祭りや伊勢講などの代参で、日常生活に晴れの行事をもちたらず民間神道（民俗宗教）が行われていた。特に人々の従事する、なりわい（生業）が豊饒であるように祈る心は、そこに種々の神々が生業ないし業種に関与してくることを求めた。こうして八百万の神々が独自の神威、霊力、属性を持って、その信仰対象となって祀られてきた。

(1) 農業にかかわる神々

①宇迦之御魂命（伏見稻荷大社……京都）、食物の御霊の神といわれている。稻荷はその文字からも主食の稲と関係している。

②豊宇氣毘売神（豊受大神宮：伊勢：外宮）、農業神として、最も重んぜられている神で、古事記にのみ登場する神である。伊邪那岐・伊邪那美の神の御子で、農業神の和久巢日神の御子である。豊宇氣は豊受とも表記されている。

③その他の農業神としては④宇賀神 ⑤大物忌神が祀られている。

④五穀の神としては⑥神産巢日神 ⑦大宜都比売神 ⑧天照大神 ⑨保食神 ⑩稚産霊神 の神々が祀られ、穀物守護の神に大年神・伊佐波登美神などの神々が祀られる。

⑤ 田を開墾する場合には、大地主神、埴山姫神が祀られる。
 ⑥ 神々の勧請による場合としては、田植えのとき、災害や鳥害・虫害の際、あるいは雨乞いのとき、それぞれに応じて、神々を勧請して、無事に作物が出来ますようにとお祭りを行う。収穫ともなると、これまで加護を願った神々、産土神などに供物を供えて祀った。

(2) 養蚕に関する神々

記・紀には大宜都比売神・保食神・稚産霊神の神々から蚕が産まれ、天照大神が養蚕の道を始められたと伝える。これらの神々は養蚕の神として祀られている。

(3) 漁業に関する神々

① 八重事代主神（美保神社……鳥根）、大国主神の御子である。漁業神として祀られる。
 ② 火照命、海幸彦の名称で親しまれている神。兄弟の神々が海と山に分かれ、その幸を各々が主宰した話是有名である。この故事から漁業の神として祀られている。
 ③ その他 ①大綿津見神（海の神） ②保食神（食物の神）も漁業神として祀られている。

(4) 狩猟に関する神々

① 大山津見神（山の神）

② 火遠理命（山幸彦の兄弟）
 ③ 保食神

(5) 商業に関する神々

① 宇迦之御魂命（お稲荷さんで親しまれている）
 ② 大国主神（大黒さん）
 ③ 事代主神（恵比須さん）
 ④ その他蛭児大神・大市姫神（市の神）
 ①の宇迦之魂命はもともと農業の神ではあるが、その神威が拡大して商業の神となった。出雲大社の祭神大國主神の場合は、ダイコクという音から、印度の大黒天との習合がなされたものである。

(6) 工業に関する神々

① 天目一箇神（多度神社……三重県）、鍛冶・フイゴの神であるため、金属精錬の神として祀られている場合が多い。
 ② 金山彦神、金山姫神は鉾山の神で、金、銀、銅山をはじめ石炭の山に至るまで、およその工業に関連する業種では、山の神とともに、あるいは単一に祀られていることが多い。
 ③ その他工業では火を必要とするので火産霊神、また水も必要となるので水神として弥都波能売神、陶器には

土が重要だから埴安彦・姫神や大陶祇神が祀られるのである。

(7) その他の生業

塩、砂糖、醤油、豆腐、肉、菓子、お茶、酒、織物、建築、工事、運輸、芸能、学問等限りなく数多い。このように見てくると、生活態としても誠に多神教の民族宗教であることを実証している。

八 天照大神考

天照大神が神社神道の本宗、八百万の神々の中心的神格としてその座を占めておられることは、重視されるべき民族祭祀の伝承であり、日本文化の伝統でもある。神社神道が、もともと教学を押しつけたる必要のない信仰伝承であったとしても、現在密度の深い国際関係においては一考を要する問題である。日本人の信仰的営みの根底にあるその心意の体系がいかなるものであるのかについて解明することは、新しい文化創造を試みる世界の動向においては急務としなければならぬ。天照大神は太陽神（日神）なのか、もし太陽神ならば、日本人は何故にそれを祀ってきたのか、太陽系の中心にある天体の一恒星を神とするとはどういうことか、今まで歴史的に信仰を保持してきたとしても、今後なおわれわれ自身の信仰として生き続け、伝承されるべき意味があり得るのかという問いかけがある。

上代人の心にわれわれのいう物質概念はなく、物は働きとして認識されていた。太陽はわれわれの理解する物

体としての太陽ではなく、働きとして、光として感じとった。上代人が太陽の偉大さに畏敬の念を持ったのは、実質的には日の光、その本体が光り輝くという働き、そこに神霊の実体を感じとっていたのである。この態度は、恐らく時代を越えて人間の基本的生に対する構えについて、永遠の生命を持ち続けるに違いない。現代人はそれは自然崇拜で自然神としての神格を認めたものというであろう。しかしわれわれの住むこの世界は、神代七代に成りませる神々によって造成され、われわれが自然と呼ぶ国土山川は、神々とともに血縁の同胞として生んでおられる。

古典神話では、既にこの段階で自然神と、血縁による祖先神との間に、同一化の過程が踏まれていた。こうして自然神と人格神との宗教的な次元における結合が成就されたのである。これが日本民族の根本的な宗教心意であった。もともと自然が神であり、人間が神の子という信仰の歴史が、それを裏付けたのである。この天照大神が皇祖神として信仰されてきたことも、その祭祀も、皇室の伝統であるばかりではなく、日本人一般の信仰でもある。この事実は今日も何ら変化していない。従ってわれわれは、皇室が天照大神を祖神として、その祭祀を継承することに、ほとんど何の疑問も持っていないのである。

九 神道の罪の意識

神道は罪悪行為のほかに、災いとか穢の禍事の一切を含めて罪とした。私的な、また身体的罪よりも、公共の福利と秩序を破壊するものが、より重大視されている。神道は罪を天つ罪と国津罪とに分けて考えた。そうし

てこの罪の一切が祓によって解除されるという信仰がある。

罪がもし原罪という言葉の意味するように本有のもの、すなわち内在的で本質的なものだと思われれば、それが穢や災いと同質視され、祓いやられるものだという大祓の発想は、出てきようのないはずのものである。原罪は超越者・絶対者を、それを説く前提として予想し、それとの信仰的なかかわりの中で、懺悔、受戒、贖罪、赦し、そして救いという信仰的な諸要件を必然的に要請する。

これらのものは、神道が持つ存在理解の体系とは本質的に相いれようがない。神道では人間の罪や穢は人間の慎みや勤しみ、そして神々の力によって祓い除かれると信じられてきた。禊や祓は浄めの手続きであり、禍を除き、神の祝福を受けて生成の営みに参与することが、人間の責任だとも考えられてきた。

そうしたとき、罪穢れを強力に吸収し、封じ込めてくれる呪力を持つ存在として、人間が感じとったものが神である。そのための神迎えの時と場所を設けて、罪穢れを吸収してもらおうとした。これが神事の始まりである。まず祓えの行事として祓詞、祝詞、祈願の神事が挙げられる。人間が犯すであろう、あらゆる罪を神々にゆだねる。すると、速川の瀬に坐す瀬織津比売が大海原に持ち出し、潮流の行き合いに坐す。速開津比売が、その罪穢れをがぶ呑みとする。これを気吹戸主が根の国・底の国に吹き放ってしまう。最後に根の国・底の国に坐す速佐須良比売が持ちさすらい、ついに消滅させてしまう。

このように、海の浄化作用に神を感じた祖先の心は、罪穢れは大海原の果てにあると信じられた根の国・底の国に至って、初めて浄化されると信じた。罪穢れはそれほど恐るべきもので、神々によってしか祓いきれないものなのである。祓えの呪力は、神が人間に対して持つ威力である。神道の神々は、その発想の始原から人の罪禍を見直し、聞き直す心の働きを示され、人のあるがままを神の子として受容しておられるのである。こうして神道では至善の境地を禊祓いによって体得できると信じた。

十 神道の現世主義

(1) 現世主義

神話は混沌から説きはじめられ、国生みの神々がこれを修理固成され、その御業を神の生みの子としての人間が継承する話として語られている。そして神話の最後は、天照大神が子孫のそうした営みを弥栄（天壤無窮）なものとして、予想することで閉じられている。

皇孫瓊瓊杵尊を国土に遣わされるとき賜うた天壤無窮の神勅がそれを物語るのである。神勅は「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国はこれ吾が子孫の王たるべき国なり。宣しく爾皇孫就きて治らせ、ささくませ宝祚の隆えまさんこと、当に天壤と窮りなかるべし」と、皇位の不動と永久性とを宣言されたものである。八世紀において、国民がそれ以前からの歴史と伝統とに立脚し、信念として把握した政治原理を謹厳に表白したものである。この世を永遠に生成発展するものとして寿いでいるのである。

日本人はその歴史の初めから現世主義であり、かつ樂觀主義であつたといつてよい。本質的には現在も決して変わっていないと思われる。現世の幸せ、現世利益を追い求め、神々に家内安全、商売繁盛を祈り続けている。農事はもちろんだが、都市に住む商工業者、一般サラリーマンたちも、直接宗教との深いかわりを意識しない

まま除災招福の願いを持って、年中行事や民俗行事を實踐している。こうして生業に勤しむことが、この世の生の目的であり、存在の意味を成就することだと信じられてきたのである。

神道では晴れと曇りの区別はあっても、聖と俗の差別は思惟されていない。神祭のときが原則的に晴れるときである。人生儀礼としての出産時、成人、婚姻などに伴う祝儀も、非日常的だから晴れの行事であり、それに対する一般が曇りである。この調和のリズムで生活を整えた。

(2) 死後の世界

記紀には他界について、伊邪那岐命の黄泉国訪問の伝承がある。また高天原、日の若宮、常世、海宮、根国、（注） 妣国などと記すのであるが、この中のどれについても、中津国（現世）と本質的に違う世界としては描かれていないのである。他界に関する伝承信仰にも、現世と同一線上の思惟にあると見ることが出来る。死ねば必ずこの世界に行くとも定められてはいない。つまり他界が第一義的に大切な世界なのではないということ、その世界は行ききりというのではなく、何時でもこの世の祭を受けて帰ってこられるということである。死後供養として、命日、お彼岸、お盆の時期に集中して、特にお盆には死霊、あるいは祖霊を年々歳々お迎えして祀っている。死者の国について神道では詳しい描写を試みたことがない。しかもそれは現世と断絶したのではなく、ほとんど同次元の世界として思惟されてきたのである。他界は完成された理想郷ではなく、逆に現世と密着し、現世を中心に方向づけられた世界である。

十一 終わりに

以上の説述の中で、統一思想との関連についてはほとんど触れなかったので、その二、三の事項について述べてみたい。

古代人の宗教的実修が社会生活慣習の中に没入していたため、外来宗教に接触して、初めて神道という宗教的自覚を喚起した。神道の宗教活動にとって重要なのは神社であった。神と人と自然が一体となって、とり運ばれる宗教的実修である祭礼を通じて、新しい霊的活力が注がれる場所が神社である。神道はこうして、教理經典を持たない、儀礼中心の行型宗教として、経典型宗教と対比される。その点では神学的統一理論化（経典成立）がなければ、民族的宗教の域から抜けられないものと思われる。

記紀神話は、人間を含む生物万般、大地とともにすべて神々がお生みになったと伝えている。当然のことながら、人々は神の子の自覚を持っていたことを物語っている。統一思想では、神が人を神に似せてつくられたという。神道では神が人をお生みになったという。人の出現について、両者の思惟することはどのように異なるのであろうか。神道の生む・生まれるということは、神と人との親子関係の認識である。李相憲先生の「統一思想要約」二十五頁序②（一九八六年教授招聘共学術セミナー）に「人類の父母である神を云々」の表現には、神は人類の親であることを意味している。神道の日本民族も人類構成の一部である。人類一般までに拡大してみれば、人間に対する観点が同一視される。

統一思想と神道思想は、神を万象の根源と見ることに於いて同一である。しかし、統一思想で説く神は一神であり、神道は八百万の神々を信じる点が異なっている。次に重要な問題として、神道の天照大神信仰がある。統一思想の説く「個性真理体」に関する理論によって考察を進めていけば、神道はより深い神学的認識理論を得られるものと思う。

本稿を草するについては下記の著作を参考にした。著者各位に深く感謝の意を捧げる次第である。

『記・祀の古典（国史体系本）』吉川弘文館

梅田義彦『神道の思想』雄山閣（一九七四年五月二十五日）

『日本宗教辞典』弘文堂（一九八五年二月十日）

上田賢治『神道神学』大明堂（一九八六年十月六日）

コメント

一 序

又石大学教授
姜漢永

私の神道に関する印象としては、大東亜戦争のときの韓国に対する植民地政策の一貫としての神社神道の非情な仕業だけが、今もなお生々しく私の脳裏に残っています。しかしこのたび田中教授の論文にお目にかかり、神道に関する誠に素晴らしい真面目さを斟酌するようになりましたことは、非常に幸いなことと考えざるを得ません。というのは、私の間違った過去の神社神道観が是正できる機会をこの度持ち得たためであります。日本古来の伝統的民間信仰であり純粹な神道が、だんだん政治権力に利用されその侍女役に墮落し、政治権力と戦争の下手者役に務められたとこのことを考えてみると、その事情は実に哀惜の念に堪えません。

そうして、ついに神社神道は閉鎖的、排他的なところに流されていったのでありましょう。独善の道から不本意ながら征服の先兵になってしまい、これによって日本民族は閉鎖的、排他的、利己的な今日の情勢をもたらしたのではないのでしょうか。一日でも早く神道それ自身が持っている本然の実情